

## トピック A. 小・中・高校生の比較 )))

### (1) 教科の好き嫌いと理解度、興味

国語、社会、数学(算数)、理科、英語、音楽、美術、体育、技術・家庭の9教科の中で好きな教科ベスト3は、小学生①体育(80.9%)、②理科(71.3%)、③国語(61.0%)、中学生①体育(65.1%)、②理科(52.8%)、③数学(45.4%)、高校生①体育(65.6%)、②社会(45.0%)、③国語(42.5%)であり、いずれの学校段階においても体育の人気がもっとも高い。

いずれの教科も「好き」と答える者は小学生でもっとも多く、中学生、高校生になると減少するが、特に理科の人気低下は著しい。小学生と中学生では2番目に人気がある理科は、高校生になると最下位になる。(図3-1)

この原因を示しているとも考えられるのが授業の理解度(図3-2)である。教科の好き嫌い同様、授業の理解度は小学生から高校生にかけて段階的に低下している。さらに、ここでも変化著しいのが理科(71.3%から27.3%に減少)である。また、勉強をしていて「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる機会は、小学生から中学生にかけて確実に減少していることも明らかである。(図3-15)

### (2) 学校外での勉強

塾、家庭教師、通信教育、塾や予備校の夏期講習といった学校外教育機関の利用率がもっとも高いのが中学生である。これらの利用率は高校生よりも小学生のほうが高いが、代わりに高校生の利用者が多いのは、学校が提供する正規の授業外の学習機会(補習授業、学校の夏期講習)である。(図3-7)

家での勉強も、高校生は中学生より学校の授業にウエイトをおいたものとなっている。高校生が家でする勉強のベスト3は①学校の宿題、②学校の授業の予習、③学校の授業の復習であるが、中学生のベスト3は①学校の宿題、②学校の授業の復習、③書店などで売っている問題集・参考書である(図3-6)。また、家では学校で使う教材を中心に勉強する者は、中学生では57.9%であるが、高校生では92.8%にのぼる。(図3-8)

### (3) 学習上の悩みと成績観

学習上の悩みは、学校段階に応じて変化する。小学生の唯一の悩みともいえるのは教科の好き嫌いであるが、これに対して中学生や高校生の悩みは数多い。中学生の特徴は、自己の能力観に関連する悩みを持つ者が多いことである。一方、高校生の悩みは、勉強すること、学習内容そのものに対する疑問にあり、能力観に関する悩みを持つ者は中学生よりも少ない。(図3-16、図3-17)

自己能力に対する否定的見解は、中学生の成績観にも現れている。「どのくらいの成績がとれたらいいか」「うんとがんばればとれる成績」に対する中学生の回答は、小学生や高校生に比べて控えめであり、自己の能力の限界を低めに設定する傾向が見える。(図3-11、図3-12)

## トピック B. 1990年との比較 )))

### (1) 特にがんばって勉強したい科目

芸術と体育をあげる者が増加し、また理科をあげる者が減少した。(図1-7)

### (2) 授業の受け方

「マンガをかいたり、文房具で遊ぶ」(第1回31.1%→第2回21.4%)と「近くの人とおしゃべりする」(同56.2%→44.8%)の2項目で数値が小さくなっている。手いたずら型と私語型が減少している。(図1-8)

### (3) 家庭学習の頻度

「ほとんど毎日する」が28.2%から22.0%へと減少し、「家ではほとんど勉強しない」が17.3%から23.4%へと増加をみた。家庭での学習習慣を保持する層が減少し、全体として家庭学習の習慣が失われる方向へとシフトした。(図1-9)

### (4) 勉強時間、テレビ視聴時間

平日の家での平均学習時間は、第1回調査の1時間32分から1時間17分へと、15分減少した。「ほとんどしない」者が16.8%から24.1%へと増加し、逆に3時間以上学習する者が17.8%から10.3%へと減少した結果である。ここでも家庭学習習慣の衰退というベクトルを確認できる。他方平日のテレビ視聴時間は、学習時間とは対照的に増加をみた。平均時間の概算は、第1回1時間46分から第2回1時間55分へと9分長くなっている。(図1-17、図1-18)

### (5) テスト勉強の開始時期

テスト勉強の開始時期が遅くなる傾向が明瞭に認められる。(図1-20)

### (6) 家での勉強内容

大きな変動はないものの、学校の授業の予習が55.1%から59.2%へ、学校の授業の復習が36.7%から39.1%へと増加し、わずかながら学校の授業中心の度合いが強まっている。(表1-3)

### (7) 学習塾と予備校

補習塾が44.5%から35.8%へと1割弱減少し、その分進学塾とその他が増加した。(図1-27)

### (8) 通信教育、学校補習等

学校夏期補習、宅配教材、通信教育がわずかに減少し、塾や予備校の夏期講習、家庭教師が若干増加している。(図1-28)

### (9) 勉強の仕方

①「問題集の問題を解く」の増加(68.0%→75.1%)、②「辞書を引く」の減少(75.8%→64.3%)、③「教科書をくり返し読む」の増加(47.7%→56.7%)、④「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」の増加(35.1%→47.2%)、⑤「教科書ガイド・レーダーを使う」の減

少 (44.2%→30.2%)、⑥「市販の単語帳・単語カードを暗記する」の減少 (15.5%→8.7%)。  
(図1-29)

(10) パソコン等のメディア利用

「カセットテープ教材やビデオ教材を使う」は5.0%から9.4%へと増加したものの、「テレビやビデオの講座で勉強する」は6.4%から5.3%へとむしろ減少している。(図1-34)

(11) 現在の成績の自己評価

「上のほう」(選択肢1)と「上の下」(同2)の比率に変化がないものの、「中の上」(同3)が約7%、「真ん中」(同4)が約2%、第1回から2回にかけて減少し、代わりに「中の下」以下のカテゴリー(同5~7)が増加している。全体として、第2回調査では成績を下位に位置づける生徒が増加した。(図2-3)

(12) 成績観

前回第1位の「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい」が微減し(54.3%→51.4%)、第2位の「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」が増加することによって(47.6%→56.2%)、順位が入れ替わった。名門大学志向がトップの座をふつうの生活(ほどほどの学力)志向に明け渡した。(図2-8)

(13) 学習上の悩み

3項目を除いて11項目で、「そう思う」という回答が増加した。特に顕著な増加を示したのは、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」(56.8%→66.4%)と「わかりやすい授業にしてほしい」(34.3%→45.2%)である。第1回調査から第2回にかけて、多くの側面で高校生の学習上の悩みは増大している。(図2-20)

(14) 進学希望段階

第一に四年制大学(以上)希望者の減少(81.5%→76.9%、ただし第2回の数値は、四年制大学に大学院を加えてある)、第二に専門・各種学校の増加(6.3%→9.4%)、第三に短大の微減(7.9%→5.9%)、第四に高校までの微増(2.4%→5.0%)がみられる。(図2-21)

(15) 30歳時点での希望職業

民間企業の事務的・技術的な仕事と役所や官庁の事務的・技術的な仕事がそれぞれ微減し、その分準専門職(看護婦、先生、編集者、デザイナーなど)が1割弱増加した。公務員や企業の「ふつうのサラリーマン」志望が減少し、個性的な準専門職への志望が高まったといえるかもしれない。(図2-24)

《1980年~1996年 教育トピック》略年表

西暦	小学校	中学校	高等学校
1980	●小・中学校指導要録の改訂方針を通告(文部省) ⇒小1・2年生は3段階評定/到達度評価を加味		
1983			●学校教育法一部改正(文部省) ⇒公立高校入試の弾力化
1985	●「特別活動の実施状況調査」(文部省)⇒日の丸・君が代の徹底を通知		
1987	●「幼稚園・小学校・中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」答申(中教審) →調和のとれた発達/個性を生かす教育/国際理解		
1988			●単位制高校教育規定施行 ⇒単位制高等学校制度の創設
1989	●小・中・高の「学習指導要領」告示(文部省)⇒小学校1992/中学校1993/高等学校1994年施行 →小学校=「生活科」導入 →中学校=選択教科の履修幅拡大、習熟度別学級編成導入 →高校=普通教科の科目を多様化、社会科を「地理歴史科」「公民科」に分割 →「自ら学ぶ意欲」「社会の変化に主体的に対応できる能力」が求められる		「新学力観」の提唱
1990	●新学習指導要領の移行措置開始 ⇒道徳と特別活動の全面实施		●初の大学入試センター試験実施
1991	●小・中学校で40人学級全面实施		
1991	●小・中学校の「指導要録」を改訂(文部省)⇒絶対評価中心へ転換 →「知識・理解」よりも「関心・意欲・態度」を重点に置いた学習評価へ		●「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」答申(中教審) →普通科と職業科を総合した学科の新設/40人学級化
1992	●学校週5日制実施(幼・小・中・高)⇒第2土曜日休み		
1993	●「新学習指導要領に基づく中学校の教育課程編成状況」公表(文部省) ⇒約9割の学校で外国語を週4時間に		●高校教育改革推進会議第4次報告(最終報告) ⇒「総合学科」創設を提言
1994	●文部省令改正⇒学校週5日制を1995年度から月2回(第2・第4土曜日休み)実施とする		●家庭科4単位必修へ ⇒男女共必修
1995	●月2回の学校週5日制実施⇒第4土曜日も休み		
1996	●小学校に英語教育導入(中教審) ●小・中・高の学校週5日制を「21世紀初頭を目標」に完全実施(中教審) →求められる能力は「生きる力」=「自ら学び、考え、主体的に判断する能力」		

凡例：⇒…事項の簡単な解説/→…要点・関連事項・具体的内容など

《参考文献》

- ◎江川政成・高橋勝・葉葉正明・望月重信編著『最新教育キーワード137』時事通信社、1995
- ◎伊ヶ崎曉生・松島栄一編『日本教育史年表』三省堂、1990
- ◎清水一彦・赤尾勝己・新井浅浩・伊藤稔・佐藤晴雄・八尾坂修著『教育データランド'96-'97—A DATABOOK OF EDUCATIONAL STATISTICS』時事通信社、1996

## トピック C. 学校週5日制、新教育課程、メディアの影響をめぐって )))

### (1) 好きな教科

芸術と体育をあげる者が増加した。性急な解釈は禁物だが、このことは、高校教育現場で個性的な学習が重視されるようになったことの反映といえるかもしれない。(図1-1)

### (2) 土曜日の家庭学習時間

家庭での学習時間を、①平日(月曜日から金曜日)、②日曜日、③学校が休みの土曜日を対象に比較した。勉強時間の回答は、いずれの日についてもばらつきが大きく、長く学習する者とほとんどしない者に分化しているという点に特徴がある。各分布から平均時間を概算してみると、勉強時間は、もっとも長いのは日曜日で1時間35分、第二に学校が休日の土曜日で1時間21分、第三に平日の1時間17分である。学校週5日制(隔週)のねらいの1つは青少年の生活にゆとりを与えることにあり、また学校週5日制にすることによる土曜日の塾通い・受験勉強の増加を世論は危惧していた。休日の土曜日の家庭学習時間は平日をわずかに上回るもの日曜日を下回っており、また「ほとんど勉強しなかった」者は土曜日(休日)でもっとも多い。先の観点からすれば、この調査結果から、学校週5日制は一定の成果をもたらしている、あるいは少なくとも休日の土曜日がすさまじい受験準備のために使われているわけではないと評価することもできるだろう。ただし、今回の調査はむしろ、高校生の生活が学習を理由として多忙化しているわけではないこと、高校生の大多数が受験準備に忙殺されているというのは世論の錯覚であることを明示している。この意味では、学校週5日制実施にあたって危惧されていた前記の仮説自体誤りであった。(図1-12)

### (3) 家での勉強の様子

すべての項目について肯定的な回答が増加しており、とりわけ「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(45.9%→56.1%)、「机に向かったら、すぐに勉強にとりかかる」(40.1%→49.4%)で著しい。単純にみると、学習への積極性、自主性が向上したと読める。これだけの調査結果からは推測するほかないが、これらの回答は事実を反映したものというより、青少年世代の回答傾向、具体的には“*Yes-Tendency*”(P.39参照)が変化したものともみただけのほうがよいように思う。すでに明らかにしてきた家庭学習習慣の変化等と、少なくとも一致した傾向ではない。(図1-23)

### (4) 勉強の仕方

高校生の勉強方法には、地殻変動的な変化が生起しているように思われる。中には「辞書を引く」の減少のように基礎的スキルの低下を心配したくなる変化もないわけではないが、「自分のノートを作る」に典型的なように、自分なりの学習方法と過程を重視した学習パターンが浸透しつつある可能性がある。この変化は、新教育課程や新しい学力観の影響だという解釈もあり得る。(図1-29)

### (5) 多様なメディアの利用

群を抜いて利用度の高いのが「テレビゲームをする」(「よくある」と「時々ある」の合計58.7

%)で、これに「家でパソコンを使う」(21.2%)が続く。これ以外の利用率はいずれも1割未満であり、とりわけ家でパソコン用ないしゲーム機用の学習ソフトで勉強しているのは、ごくごく少数にとどまる。電子メディアを使った学習は、高校生段階では、ほとんど普及していないという状況にあるといつてよい。(図1-34)

### (6) 勉強の効用

一生懸命勉強することは、「尊敬される人になる」「社会のために役立つことをする」「精神的に豊かな生活をする」「よいお父さん、お母さんになる」「趣味やスポーツなど、楽しく生活する」の各項目について、いずれも成績上位者ほど「役立つ」とする回答が多い。他方、「一流の会社に入る」「会社や役所で出世する」「お金持ちになる」については成績による差異が小さい。つまり、一生懸命勉強した結果として得られる学歴の、社会的(地位的)経済的効用については、成績による認識の差異は小さい。このことを合わせて考えると、成績上位者は下位者に比べて、学歴のフリンジ・ベネフィット(周縁的効用)をより大きく認める傾向が強いことになる。尊敬される人になる、社会のために役立つ、精神的に豊かな生活をする、よい親になる上で、勉強が役に立つとする回答は、学歴の効用としては周辺のかもしれないが、見方を変えれば、「学び」の本質的な側面でもある。成績上位者ほど、この学びの本質的な効用を認識し、下位者ほど学歴の経済的社会的価値のみを信仰しやすいという今回の調査結果は、新学力観のもとでの高校生の勉強観を考える上で、重要なポイントを示唆している。(図2-14、図2-15)

### (7) 知的体験

自然や社会について、調べたり考えたりする(数学については解き方を考えたり工夫すること)が「好き」と答えた割合は、35~48%程度にとどまっている。具体的には、生き物や自然のこと(48.0%)、社会のしくみや歴史のできごと(44.5%)、数学の問題(34.3%)である。これらは新しい学力観のもっとも重要なねらいに含まれると考えられるが、現時点ではけっして高い数値となっていない。「すばらしい」とか「ふしぎだ」と思った知的体験を、自ら調べたり考える学習行動へと、いかにして結びつけるかが課題となっている。(図2-18)

### (8) 30歳時点での希望職業

民間企業の事務的・技術的な仕事と役所や官庁の事務的・技術的な仕事がそれぞれ微減し、その分準専門職(看護婦、先生、編集者、デザイナーなど)が1割弱増加した。公務員や企業の「ふつうのサラリーマン」志望が減少し、個性的な準専門職への志望が高まったといえるかもしれない。あえて大胆に推測を重ねていざすれば、新教育課程における、個性化教育、特に生き方教育が、この変化の背後にはあるのかもしれない。(図2-24)